

18切符で9時間かけ上京



役柄ではこわもてでも、普段はにこやか。自身の歩みを語る土平ドンペイさん—大津支局で

大部屋出身の俳優 土平ドンペイさん(52)―草津市④

はい上がる人

わたしの歩跡

「1996年、俳優活動の舞台を東京に移す。ほとんどツテはなく、手にした唯一の武器は強烈なこわもてだ」

強烈なキャラの写真入りのPR資料を作って営業回りのアルバイトして、残りの1週間は東京ですね。一番安かった高円寺(杉並区)のサウナに連泊して、制作会社を訪ね、プロデューサーの見当を付けて「京都で役者をやっていた土平です。これ、僕の写真集です」。ほとんど相手にされないんですけど、東京に行くたびに回るうち、プロデューサーがたまりかねて「また来るの?」この作品で

なることになるんです。

1日で終わる役が多く、夜行バスで前夜に滋賀を出て、朝5時に着いて現場に行くと、その日の夜行バスで帰ったり。バス代が出演料より高いんですけど、東京で活躍するには東京の監督と出会わなかんし、スタッフにも知ってもらわなかん。

「戦国志 不動」(1996年)にやくざ役で出演し、三池監督を最後に頼ることになる。事務所で紹介いただけました制作会社「エクセレントフィルムズ」(東京都目黒区)がありまして。同社の作品で、キャスティングをしていた方が「土平君、この作品も決めたいし、これも決めたいしね」と、役(台本に名前が載る役柄)を2、3個人入れてくれはって、お世話に

作家が感心し紹介

たことは、いずれ自分をほめたらなあかん。役者を一生の仕事にしたいという土平の原点は18切符やって思うんです。

その頃、俳優活動もされている作家の中谷彰宏さんとVシネマでちらっと共演して、18切符の話をしたんです。3カ月もせううちに「土平君、本送っておいたし」って連絡があった。何の本やる。10冊ぐらい届いて。「会社で教えてくれない50のこと」(ダイヤモンド社、PHP文庫)。見てみたら、その一つの章が僕の話なんです。自分で読んで感動しました。

たとえば、本人も偉いが、「奥さんも偉い」とか。「見るからにヤクザ」だが、「話してみる

「恋人役やりましょう」



作家の中谷彰宏さん(60) 写真・中谷彰宏事務所提供

「エイソード」名前覚えの達人。撮影現場は衣装合わせから始まりです。衣装合わせの現場で、20人近くのスタッフが一気に紹介されます。覚え

「エイソード」名前覚えの達人。撮影現場は衣装合わせから始まりです。衣装合わせの現場で、20人近くのスタッフが一気に紹介されます。覚え



PHP文庫版の「会社で教えてくれない50のこと」。第11章でドンペイさんが紹介されている

「中谷さんは同じ章にこつこつといる。「条件に恵まれている人のほうが、熱意がなくなったり、現状に文句を言うことが多くなります」

【編集局・大澤重人】 1つ1つ、水曜掲載

【同1】中谷彰宏さんメッセージ いちゃんは名前で呼びます。覚えてい

【同2】テニスコーチの達人。大津プリンスホテルでテニスのコーチをしていました。トークが面白いので、一

【同3】アドリブの達人。あまりにアドリブが長いので、一緒のシーンだと、僕までカットになるので、要注意